

に於て吾等は、軍縮の解雇であるから、當然より以上の手當を支給せよと要求した、理由は、軍縮に依る被放首者は、世界平和の最大犠牲者であるから、會社はよろしく最大限度の手當を給すべきである、例へば配當額の減少をするとか、不用品買却等に依つてなり其支給せよと言つたが「それは出来ぬ、そんな事をしては、會社は立ち行かぬ(株主に申譯ないため)」と彼は言ふ、思へ、株主とは何？株主とはほんご遊んで、贅澤をして、俺達の汗と血を絞りに取り居る、遊民階級ではないか？殊に、製鋼所に於ては岩坊とか言ふ天下一の放蕩息子がある」とて、遂に前後四回の交渉も得る事がなかつた。此の間梅雨期の中をも屈せず、前後五回の演説會に或在職の兄弟に、解雇手當の少額なるを訴へた、在職の兄弟は、コレが對岸火事視する事が忍びずとて、正に同情罷業に入らんとし

5. 第七工場及び第十五工場の争議

自重は果して吾等に力と與へた、吾等は來るべき時の準備として、工友會及び、親友會等を組織し訓練し基金を積んだ。準備は愈々整ひ計畫は出来た、先づ第七場及び、第十五工場の兄弟は、解雇手當の嘆願書を提出した。會社は十七日に回答するとして受取つた。十七日正午になるも、言を左右にして回答せぬ、この會社の不誠意なる態度に憤慨した兄弟は、憤然として退場した。其の勢に恐れした會社は周章狼狽し、古き規定の解雇手當を發表した(從來與へて居たもの)越えて、十八日こんな古臭い解雇手當は、何になるか。先きの日の被放首者はこれが増額を迫つたのでないが我々はこんな事では、承知が出来ないとい

此度は當然の主張として、要求書を提出したが、會社は、水掛論に依つて、ごまかさんとした。かくと見た、職工は、職工大會を開きて、飽く迄要求の貫徹を、期するため、今日より後は、同盟罷業を執行する事にした、會社は、此の形勢を見て、二十一日より三十一日迄休業を發表したが、團員は、互に結束を相固めた一方、演説會に氣勢を擧げ、或は神戸市民諸君に訴ふ。ピラを散布して、悪辣極まる代表的奸商の鈴木商店經營神戶製鋼所を糾弾した、折柄其の筋の高壓的取締のため、争議團員や應援團員の中から、多数の検束者を出した、火蓋を切つてこゝに十五日、即ち九月一日工場は閉鎖せる扉を、開く事となつた。されど吾等團員の意氣は工場の間々にはあまり激測たるものがあつた。此の日に、六甲山上に、全部が集合した、而して、此の大自然の懷より、下界の製鋼所を見下しつゝ、更に、氣勢を擧げて、各自熱辯を振つ

て、下山した、此の間積立金の返却を追つたので、會社は、幕所の苦しい中に在るが預かつた人の金であるから、返済の除儀なくされ、二日の正午、全部の返金をしたので、益々結束を強くした、そして、行商隊を組織して、愈々持久戦に、云つた時の結束よりはトモ入場しそくに思はれないから、會社には又も七日より十五日迄再度の休業を發表した。裏切者養成に、獨特の技量を以つて誇る製鋼所は、古谷人事係をして、切崩の總指揮として、番犬、守衛共は、死力を盡して、切崩しに務めた、悪魔も組織には叶はなかつた切崩戦は一人の捕物も、彼等は得ずかへつて吾等の團結はこれにより益々固くなつた。第二の休業明けは、一兩日中に追つた、工場主任は、責任上詰め腹切らねばならぬはめに落いつた、果然彼の工場主任は、訓練日向淺きデーゼルの、重立つ数名に主力を集中し、遂に、彼等を切崩し得た、會社の最も苦痛とす

る所のデーゼル、又其の切崩されし事は、味方の最も悲む所であつた。茲に至り死に瀕せし會社は、蘇生せるものゝ如く、攻勢に出た最後の交渉に激昂したる、四百名は、會社の表門に殺倒した、幹部以下十餘名は「プタ」箱にプチ込まれた、彼等資本家、最後の奥の手を出して(裏面には〇〇の後援を得て)得た幹部切崩の此の結果は、會社と、〇〇の豫定行

動であつたのである、それで、委員始め、團員一同は、最早や斯くなる上は、切り死に一時は覺悟を極め、總辭職の決行迄になつたが、此處は、隱忍自重し、捲土重來の望みを抱いて、一先づ出業と決めた、忘れぬに忘れられぬ大正十一年八月十八日、一同敏馬神社に集合して、隊伍整然として、労働歌を高唱しつゝ出業した。(終り)

神戸製鋼所争議記念

神戸木曜會發售